

若手研究者のための研究キャリア発見マガジン

2026. 夏号

vol.73

[インキュビー]

incu・be



特集

研究者が
「外に出る」意味

特集 研究者が「外に出る」意味

- 04 「専門知の提供」ではなく、知が機能する場をつくる
(佐藤 真久 さん 東京都市大学大学院 環境情報学研究科 教授)
- 06 研究成果ではなく、「研究者の視点」を橋渡しする
(きのした ちひろさん イラストレーター)
- 08 出会った世界を取り込み、自身の問いへと変える
(土元 哲平 さん 立命館大学 OIC 総合研究機構 (本務: 宇宙地球探査研究センター) 特別招聘研究教員 (准教授))

伝える、学ぶ、そして育む。それが研究コーチ

- 11 かつての自分と目の前の高校生を行き来し、研究を見つめ直す
(大瀧 颯祐さん 北海道大学環境科学院 修士課程 1 年)

Blast off! 世界を変える私の活動

- 12 工学研究の歴史から技術の価値を問い直す
(吉田 堯史さん 東京科学大学 環境・社会理工学院 社会・人間科学系 科学技術社会分野)

探しに行こう 自分の場所

- 14 「感情知性」でしなやかな専門性を育む
(井本 由紀さん 慶應義塾大学 理工学部 准教授 観想研究センター長)
- 16 すべての挫折を資産に変える。泥臭い「真剣勝負」が導いた AI センサー
(小林 彰人さん 日本工学院八王子専門学校 IT カレッジ AI システム科)
- 18 一人ひとりの世界を変える力を引き出す「設計者」の挑戦
(内山 啓文 さん 認定 NPO 法人カタリバ)

あの町の研究者を訪ねて

- 20 現場に触れて、研究は「解決する力」に変わった
(大平 尚輝さん 北陸先端科学技術大学院大学 博士後期課程 3 年 / 株式会社 OWL 研究所 代表取締役)

地域に根ざした研究職、公設試での挑戦

- 22 茨城の企業と人工衛星をつくる
(行武 栄太郎さん 茨城県産業技術イノベーションセンター 研究調整監)

お知らせ

- 24 第 73 回リバネス研究費申請者募集中!
- 27 私らしく、研究者として生きる道へ「アド・ベンチャーフォーラム」
- 28 リバネス採用ページ
- 30 『incu・be』を作っているのはどんな人?

研究者が 「外に出る」意味

アカデミアに残るのか、それとも外へ出るのか。博士課程に進んだ人なら、一度は悩んだことがあるだろう。今いる場所を離れることは、積み上げてきた専門性を捨てることになるのではないかと不安になるかもしれない。本当にそうだろうか。

博士の専門性とは、特定分野の知識だけではない。研究を通して培われた、問いの立て方、世界の見方、複雑なものを考え続ける姿勢。その「研究者としての視点」は、研究室の外に出ても失われない。

外の世界との接点を、自分の専門性につないでいくためには、どんな姿勢や視点が必要なのだろうか。社会との接点の中で、自らの専門性を編み直していった3人の研究者に話を聞いた。



「専門知の提供」ではなく、 知が機能する場をつくる

佐藤 真久 さん

東京都市大学大学院 環境情報学研究科
教授



環境教育を軸に活動する佐藤真久さんの専門性は、国際協力や環境政策、社会起業支援、教育現場など、多様な現場に身を置くことで形づくられてきた。そこで見てきたのは、論理だけでは社会は動かないという現実だった。専門知を持つ博士が、他者と向き合い、自分自身も変わりながら社会に関わるとき、専門性は「正しさを示す力」から「多様な人が動ける場をつくる力」へと再定義されていく。

環境問題を、生物学から捉える

佐藤さんの原点には、高校時代を過ごしたイギリスでの経験がある。1980年代後半、チェルノブイリ原発事故、北海の海洋汚染、ベルリンの壁崩壊など、世界の仕組みが大きく揺れ動く様をヨーロッパで目の当たりにした。環境問題は一国の中だけで完結せず、自然科学だけでも捉えきれない。社会や政治、経済のあり方と深く結びついている。その実感が、その後の進路を方向づけた。

帰国後は筑波大学で生物学を学んだ。「環境の変化は、まず生き物に影響を及ぼす。だからこそ基礎的なものをしっかり勉強しようと思ったんです」と振り返る。その後、環境科学研究科へ進み、生物学の基礎を環境問題の文脈で捉え直すとともに、環境政策や社会の仕組みへと関心を広げていく。専門性の出発点は、環境をめぐる複雑な問題を、科学的な基礎から理解しようとする姿勢にあった。

現場に出て、専門だけでは社会は動かないと知る

大きな転機となったのは、修士課程時代に米国西海岸の環境保全団体でインターンをした経験だった。そこでは、若い人たちが社会参加や起業を通じて地域や環境を変えようとしていた。環境を良くするには、知識を深めるだけでは足りない。人が社会に関わり、自ら動き出す仕組みが必要なのだと実感したという。その経験は、現場で得た問いから環境政策や国際協力を深く考えるという研究を加速させていった。

帰国後は、社会起業家を支援するインキュベーション・プラットフォームとして、NPO法人「ETIC.」の立ち上げに関わり、さらにイギリスの博士課程に進みながら、地球環境戦略研究機関(IGES)でアジアの環境政策や途上国の課題に向き合う仕事を並行して進めた。「私の中では、国際的な研究を通して博士号を取得することと、現



▲ UNESCO ESD 国際パートナーネットワーク会合（政策）に共同議長として関わる佐藤さん

場の課題解決にむけて仕事をするのが、頭の中で直結していました」。しかし、現場に出るほど、自分の専門だけでは通用しない場面に出会う。環境問題には、開発、貧困、教育、地域の歴史、人々の暮らしが複雑に絡み合っている。論理的に正しい説明をしても、人は動かないことがある。だからこそ佐藤さんは、「自分の領域だけでは社会は変えられない、という自覚が必要なんです」と語る。必要なのは、相手の文脈を理解し、対話を通じて互いの見方を更新していくことだった。

多様な人が動ける場をつくる

現在の佐藤さんの専門性は、環境教育の知識を伝えることにとどまらず、多様な人がそれぞれの立場から動き出せる場をつくることにある。そこで大切にしているのが、「4つのレンズ（ものの見方）」である。物事のつながりを見る「統合的レンズ」、その場の背景や歴史を理解する「文脈的レンズ」、一つの見方に閉じず多角的に捉える「批判的レンズ」、そして社会を変えようとする中で自分自身も変わっていく「変容的レンズ」である。

この視点は、博士という肩書きの扱い方にも表

れている。現場で「先生」と呼ばれると、相手が自由に話しづらくなることがある。肩書きが鎧のように働き、関係性を固定してしまうからだ。だから佐藤さんは、場に入るときにあえて肩書きを外し、「さん」付けで話す。専門家として答えを与えるのではなく、そこにいる人たちとともに考え、動き出せる環境をつくるためである。

佐藤さんは、自身の役割を「リーダーではなく、プロデューサーだと思うんです」と語る。誰かが常に先頭に立ち、他の人が従うのではない。一人ひとりの良が見え、それぞれが活かされる場をつくる。さらに、「博士の良さは、探究の面白さが分かっていることだと思うんです」とも話す。博士の力は、専門知を持つことだけではない。探究の面白さを知っているからこそ、他者と対話し、社会の中で問いを共有し、新しい価値を創っていく場を育てることができる。その歩みは、博士の専門性が社会との接点の中で、「正しさを示す力」から「多様な人が動ける場をつくる力」へと変わっていくことを示している。（文・駒木 俊）

佐藤 真久（さとう まさひさ）プロフィール

東京都市大学大学院環境情報学研究所教授。筑波大学第二学群生物学類卒業、同大学院環境科学研究科修了。英国国立サルフォード大学にてPh.D.取得。地球環境戦略研究機関（IGES）、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）を経て現職。現在はUNESCO ESD-Net 2030 フォーカルポイント、UNESCO Chair（責任ある生活とライフスタイル）国際理事会理事などを務める。環境教育、協働ガバナンス、社会的学習、中間支援機能などを軸に、研究・教育・実践を往復しながら、地域マネジメントや組織論、学習・教育論の連関に関する研究と実践を進めている。

研究成果ではなく、 「研究者の視点」を橋渡りする

きのした ちひろ さん

イラストレーター

ウミガメの生態研究をして博士号を取得した、きのしたちひろさん。イラストレーターである彼女が描くイラストは、「生き物を知るうちに、いつの間にか“研究者の目”で世界を見始めている」ようだ。生態学者の視点を持ち、イラストで生き物の世界の面白さを広げるきのしたさんの独自スタイルの獲得に迫る。



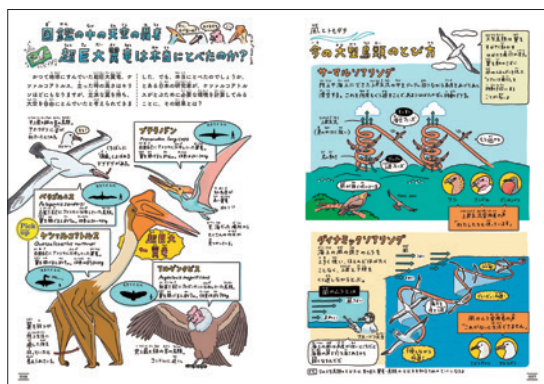
生態学者として、生物を観察する日々

幼少期から生き物が大好きだったきのしたさん。特に好きなクジラやイルカを図鑑で見ることも多かった。「研究をする前は、図鑑には生き物の情報がたくさん載っていたので、大抵のことは解明されていると思っていました。」しかし、海中の様子を観察することが容易ではない海洋生物は、基本的な生態がまだまだわかっていないことが多い。きのしたさん自身も、動物の身体にデータロガーを付けて行動データを取得するバイオリギングの分野で、ウミガメの潜水行動や体内の生理状態を解明する研究で博士号を取得。ロガーのバッテリーのもちやそもそも回収できるのかどうか。限られた条件の中でどのようにデータを取得するか、そうした試行錯誤の過程が肝になる。「あるアザラシの研究者と話した時は、ヒゲの動きを検出することで採餌行動のタイミングを推定するアイデアを聞きました。図鑑に載っている生態情

報って基本的にそれを観察した人がいて、その人を通してしか出てこない情報なんです。その人がどういうところに興味をもって観察をしたのか、その視点がおもしろいんです」ときのしたさんは語る。

イラストで論文の「物語」を具現化した経験

大学院に進学した頃、恩師である佐藤先生の「研究者が研究だけをしていていい時代は終わった」という言葉を聞いた。特に野生動物や絶滅危惧種などを扱う研究の多くは公的資金によって支えられており、研究成果を一般市民に還元すべしという考えが、研究者の間で広まりつつあった。しかし、研究者の主な発信手段は論文である。論文には、問いの立て方から仮説、検証に至るまで、研究者の思考が詰まっており、きのしたさんにとっては「映画を一本見るような体験」と言えるほど豊かな情報が含まれている。一方で、その内容は専門的であるがゆえに、一般の人が容易に



▲研究者の思考も伝わるように描いた生態図鑑

読み解けるものではない。研究の面白さが十分に届いていないという実感があつた。

そこで、きのしたさんは、論文の中にある思考の面白さをイラストで伝えようと考えた。イラストであれば、研究者の頭の中にある思考の流れを可視化し、専門的な内容であっても直感的に伝えられる。もともとイラストを描くのが得意で、大学院の研究と並行しながら少しずつ仕事を受けていった。実際に自分の描いたイラストがとても感謝され、研究者側の課題を解決していく手段として少しずつ自信になっていった。論文が研究者同士の言語だとすれば、イラストはより多くの人に開かれた言語である。きのしたさんはその両方を行き来しながら、研究の面白さを社会へと橋渡ししている。

研究者の思考を理解し、可視化する知識を磨く

博士号取得後、きのしたさんはポスドクとして研究を続けながら、イラストの仕事も並行して

行っていた。研究の成果を効果的に発信することに課題をもつ研究者に寄り添い、イラストとしてビジュアル化する仕事だ。そうすることで、その研究者の研究成果が世に伝わり、次の研究予算が取れる。「また次のビジュアルを依頼しようかな」と次の仕事が決まり、そうした小さいサイクルが回り続けていく。仕事としての手応えもどんどん大きくなっていった先で、きのしたさんは、独立して活動することを選んだ。専門性を持っているからこそ、他のイラストレーターが入りにくい領域にも踏み込むことができる。ポケモンを生態学の視点から取り上げる「ポケモン生態図鑑(株式会社ポケモン著、小学館)」のイラストレーターも担当し、生態学の視点を広く一般の人にも広めていつている。「これを見てポケモンをおもしろいと思ってくれた小学生が、将来生態学に出会った時に『これあの時読んだポケモンの話じゃん』と思い出す、そんな楽しみ方をしてくれたら良いなって思います」。研究者の思考を理解し、それを可視化できるという強みが、独自の仕事のかたちを生み出している。研究者としての経験を持ちながら、伝える側へ。その選択が、きのしたさんの現在を形づくっている。(文・土屋 菜摘)

きのした ちひろプロフィール

博士(農学)。東京大学大学院 大気海洋研究所で佐藤克文教授に師事し、ウミガメの生態を研究。学位取得後は、学振特別研究員PDなどを経て、現在はイラストレーターとして活動。生物・教育系の書籍や児童書のイラスト、科学論文の図解やグラフィカルアブストラクトの作成を手掛ける。

出会った世界を取り込み、自身の問いへと変える

土元 哲平 さん

立命館大学 OIC 総合研究機構(本務：宇宙地球探査研究センター)
特別招聘研究教員(准教授)

人の心や自己形成を、文化や環境との関係のなかで捉える。そんな文化心理学をバックグラウンドにもつ立命館大学 土元哲平さんが現在進めている研究テーマは「宇宙と人間」だ。その背景には、教員採用試験での挫折を起点に、「人は環境との関係のなかでどのように変化するのか」という問いを追い続けてきた歩みがあった。



出発点は、人が変わる「転機」への問い

人は人生のなかでどのように変化し、新しい生き方へ移行していくのか。土元さんの研究は、この「転機」への問いから始まった。その背景には、自身の経験がある。鹿児島大学理学部で物理学を学び、教員を志していた土元さんは、教員採用試験での不合格を経験する。それまで大きな挫折を経験してこなかった彼にとって、そのできごとは大きな「転機」だった。

大学院に進学後も進路に迷うなか、自分自身の価値観や欲求を深く見つめ直すことになった。そこで土元さんは、「どんな職業に就くか」だけでなく、「人はどのように人生を方向づけるのか」という問いそのものに関心を抱くようになる。博士論文では、転機を、個人の心の中だけで起こるものではなく、他者との関係や社会との接触のなかで生まれるものとして捉えた。自身の経験を出発点として、人が人生の転機のなかでどのように変化していくのかを探究する研究へと進んでいった。

「文化化された自然」という視点を得て

博士号取得後、土元さんの研究対象は、離島、庭、風景へと広がっていった。一見すると専門領域が大きく変わったようにも見えるが、土元さん自身はそれを「専門を変えた」とは考えていない。むしろ、「フィールドが広がる感覚より、自分の問いを練り上げていく感覚の方が強い」と語る。

世界的に著名な文化心理学者、ヤーン・ヴァルシナー氏との出会いをきっかけに、土元さんは「庭」というテーマを本格的に考えるようになった。彼が着目したのは、庭が単なる自然ではなく、人によって意味づけられた「文化化された自然」だという点だった。私たちは自然を、そのままの自然として見ているわけではない。家の窓から見える山、河川敷の並木、通学路の風景——そうした自然は、人の記憶や感情、人生経験と結びつき、「ホーム」の感覚を形成している。実際、土元さん自身も、大阪へ移り住んだ際、「セミの声が聞こえない」という違和感をきっかけに、故郷・



▲ヤーン・ヴァルシナー氏との出会いをきっかけに、庭をテーマに自然と文化の関係を論じた書籍の編者を務めることに。写真は、監訳を務めた『文化心理学への招待』（誠信書房）刊行を日本質的心理学会第21回大会にて報告した場面。

鹿児島島の風景が自分をかたち作っていたことに気づいたという。

やがて「月面居住」も研究対象になった

現在、土元さんが取り組んでいるのは「宇宙と文化心理学」だ。月は、神話や文学、記憶と結びつきながら、長らく人類にとって「眺める風景」であり続けてきた。だが、近年、月面基地建設や有人探査が現実味を帯びつつある。人類がそこに居住するようになったとき、月は単なる天体ではなく、「暮らしの場」へと変化する。土元さんは、この変化を「月がホームになる」という言葉で表現する。宇宙という極限環境において、人間はどのような「自然」と共に、どのように自己を形成していくのだろうか。このテーマは、これまでの

文化心理学的問いを、地球の外側へまで押し広げた試みとなっている。

自分の専門は、そのときの環境が決める

土元さんは、自分の専門性さえも「外部環境との関係のなかで変わる」と話す。自分が所属する組織や、出会った研究者、共同研究者、そしてフィールドとの関係によって、研究者としての立場や役割がかたち作られていく感覚だというのだ。ただし、そういった外部環境に対して、単に迎合しているわけではない。むしろ、与えられたテーマや環境を、自分自身の問題意識へ引き寄せながら、「自分なりの文化心理学」を作り上げる主体性が必要だとしている。

転機、離島、庭、そして宇宙。一見するとバラバラに見えるこれらのテーマはすべて、「人はどのような風景のなかで自己を形成するのか」という問いへと収束していく。土元さんの研究は、たった1つの問いを深く掘り続けた結果として、研究領域そのものが広がっていった軌跡なのだ。

（文・磯貝 里子）

土元 哲平（つちもと てっぺい）プロフィール

鹿児島大学理学部にて人工衛星の開発運用に携わった後、同大学大学院にて教育学を、立命館大学大学院にて心理学を学ぶ。日本学術振興会特別研究員PD（大阪大学）、中京大学心理学部任期制講師などを経て現職。「オートエスノグラフィーと詩的探究フォーラム」代表、「TEAと質的探究学会」常任理事・事務局長、「日本心理学会」男女共同参画推進委員、「キャリア教育学会」学会誌編集委員。博士（文学）。



外に出て、専門性を再定義する

佐藤さん、きのしたさん、土元さん、それぞれに起こったのは三者三様の「専門性の再定義」だった。

佐藤さんは、自分の専門だけでは社会は変えられないという限界を受け入れ、他者との対話を通して視点を更新し続けた。きのしたさんは、論文の奥にある研究者の思考の面白さを、他者へ届く形へ翻訳した。土元さんは、出会った風景や違和感を切り捨てず、自分の問いへと引き寄せ続けた。

共通しているのは、専門性を閉じなかったことだ。外の世界との接点の中で、自分の専門を問い直し、研究者としての視点そのものを組み直していくことで、研究者としての自分を更新し続けられるのだ。専門性は新しい世界を捉え直すための「視点」であり、何度でも更新できる。外へ出ることは、研究者としての自分の生き方を育てていくプロセスなのだ。

伝える、学ぶ、そして育む。それが研究コーチ

若手研究者が中高生の研究に伴走して指導する研究コーチ。単なる教育活動以上に、自分に返ってくる気づきや発見があるはずです。このコーナーでは、研究コーチの経験を通じて成長する若手研究者の姿を取り上げます。

かつての自分と目の前の高校生を 行き来し、研究を見つめ直す

北海道大学環境科学院 修士課程1年

大瀧 颯祐 さん

北海道大学大学院で熱帯ウナギの生態研究を行う。小学生の頃より生き物を育てることが好きで、それが転じて中高生時代は生物部に所属。生物部で魚やカエルを育て、水槽も自作しながら研究に没頭。2025年度よりマリンチャレンジプログラムに研究コーチとして参画した。



大瀧颯祐さんは、熱帯ウナギの生態研究を行っている。現在は奄美大島でオオウナギを採集・解剖し、海外の標本と比較しながら、熱帯性のウナギがいつ性分化するのかを検証している。自分の手を動かして仮説検証を進めていく過程に、研究の面白さを感じている。

そんな大瀧さんの研究の原点は、中高時代に所属していた生物部での活動にある。魚やカエルを育て、水槽も自作しながら研究に没頭していた。当時参加したマリンチャレンジプログラムでは、自分の研究を大人や同世代に見てもらい、反応やアドバイスをもらえることが大きな喜びだった。「当時は、大人から反応やアドバイスをもらえることが嬉しかったんです」大会前には原稿を何度も読み返し、想定問答を繰り返した。研究者や同世代から新しい視点をもらえる場合は、大瀧さんにとって研究を続ける原動力になっていた。

そして2025年度、大瀧さんは、かつて自分が参加していたマリンチャレンジプログラムに、今度は研究コーチとして戻ってきた。担当する高校生とは、月1回の面談だけでなく、大会前には

発表練習にも付き合い、どうすれば研究の面白さが伝わるかを一緒に考えた。その時間のなかで、大瀧さんはかつての自分自身の姿を重ねていたという。研究コーチとして中高生に向き合う時間は、単に生徒を支える時間ではなかった。自分自身が、なぜ研究を続けているのか、その原点を見つめ直す機会にもなっていた。

一方で、大瀧さんは、自分の中高時代のやり方をそのまま今の生徒たちに当てはめようとは考えていない。AIを活用して論文を読み、考察を深められる時代だからこそ、研究コーチには過去の成功体験を押しつけるのではなく、自分がかつて感じた研究の熱量を手がかりにしながら、今の生徒たちに合う方法を一緒に探す役割があると感じている。

かつて研究に夢中だった中高生としての自分と、研究者として研究に向き合う今の自分。研究コーチとして過ごす時間は、その二つの視点を行き来しながら、次世代の研究を支えると同時に、自分自身の研究との向き合い方を見つめ直す時間にもなっている。

(文・岩田 愛莉)

研究コーチは随時募集中！登録はこちら！

(リバネスIDのログインが必要です)



世界を変える。それは大それた事かもしれません。それでも小さな一歩を踏み出すところから、それは始まります。本コーナーでは『リバネス奨学金』を活用して、世界を変える活動を開始した若手研究者の声を紹介します。

工学研究の歴史から技術の

価値を問い直す

東京科学大学 環境・社会理工学院 社会・人間科学系 科学技術社会分野

吉田 堯史 さん



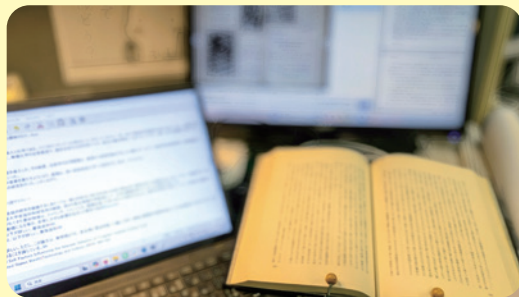
修士課程1年の冬、研究に行き詰まりを感じなかで、リバネス奨学金に応募しました。当時、「工学研究の役割とは何かを歴史的に考えたい」と思いながらも、それをうまく言葉にできずにいました。技術が好きだという感覚と、歴史研究とのあいだで折り合いがつかず、もがきながら応募したことを覚えています。

私の研究の原点は、高専時代の経験です。機械系製造業の技術力に憧れを持ち、製造現場のインターンシップに参加しました。そこで目にした技術は圧倒的で、今でも鮮明に覚えています。特に、150トン吊りクレーンが複数連携し、300トンの部品をミクロン単位で調整しながら全長190メートルにもなる建物を建造する技術には、大きな迫力がありました。何より、長い時間をかけ、技術と勘を磨いて建造にあたる技術者に憧れました。ところがその企業は経営悪化により、人員整理と事業所の閉鎖が進みました。そこで、「自分が憧れた技術の無力さ」という現実直面し、割り切れない思いを抱え、技術史研究へ文転しました。

奨学金ゼミは、その問題意識を問いとして深める場となりました。ゼミの仲間と歴史や課題、現状を共有するために言語化することで、「結局自分が何をしたかったのか」を改めて考えるようになり、自分の中にある「割り切れない思い」が少しずつ明らかになりました。原点

から7年、私が向き合い続けてきた問いは、「技術にどのような価値が与えられるのか」というものでした。

その問いに向き合うため、現在の研究では、近代日本において「優れた技術」がどのように語られ、評価されてきたのかを明らかにしています。特に、たたら製鉄が学術的価値ある研究対象へと再編され、今に継承される過程に注目しています。今年から島根県雲南市の公益財団法人 鉄の歴史村地域振興事業団で客員研究員として、現地での文献調査や関連遺跡の発掘調査や対話などを通して、研究を進めています。将来的には、技術を単なる道具ではなく、人との関わりのなかで捉え直す研究を続けていきたいと考えています。



▲文献調査の様子

参考 公益財団法人 鉄の歴史村地域振興事業団
<https://www.tetsunorekishimura.or.jp>

探しに行こう 自分の場所

目標を見つけ、実力を養い、
理想の場所にたどり着くために
どんな道を進むべきだろうか。

どんな研究者になりたいのか、
活躍するには何が必要なのか。

そして、どんな研究キャリアがあるのか。

ただ、じっと待っていても答えは見つからない。

いろいろな人に出会い、

さまざまな場所を見ることで

自分の未来を描くヒントを見つけよう。

変化を楽しみながら

さあ、自分の場所を探しに行こう。

探しに行こう 自分の場所

「感情知性」でしなやかな 専門性を育む

井本 由紀 さん

慶應義塾大学 理工学部 准教授
観想研究センター長

言葉や文化を越境する経験から始まり、人類学を経て観想研究へと広がってきたキャリアを持つ井本由紀さん。そこにあるのは、専門の転換や断絶ではなく、自身の経験、学問、現実の出来事を統合していく歩みだった。



海外生活で得た言葉と文化への探究心

父親の転勤のため、幼少期をシンガポールで、義務教育をイギリスで過ごした井本さん。帰国子女として日本で過ごした高校時代には、カズオ・イシグロなど越境文学に興味があったことから文学者、言葉や文化の異なる環境を行き来して育った経験を活かした国際機関勤務、音楽家など様々なキャリアを考えていたという。慶應義塾大学では、異文化間で言葉の意味をどう橋渡しするのかといった翻訳論、また言葉の持つ意味についての言語哲学を学んだ。そのうち、文法や言葉そのものの仕組みだけでなく、人やその文化背景へ関心が向くようになった。「そこで分野を変えて、修士課程ではオックスフォード大学で人類学を学ぶことにしました」と井本さん。

ネイティブ人類学者からみた日本とは

留学直後は、研究者というキャリアをまだ真剣に考えていなかった。しかし、現地で日本研究に

おける第一人者である社会学者のロジャー・グッドマンさんと出会ったことで本格的に人類学の研究の道に進むことになる。「私がたまたまグッドマン先生の授業を受けていたことがきっかけです。彼が帰国子女を取り巻く社会構造の研究を行っていたこともあり、人類学が自分ごとと結びつき、世界の見え方が変わりました。鋭い視点を持ちながら、研究面でもキャリア面でも大変ケアをしてくださる先生でした」。海外生活の経験から、日本とは何か、という俯瞰的な問いを幼少期から持っていた井本さんは、日本の教育や言語教育を入り口にしながら、「日本研究における人類学」というテーマをポストドク時代に設定したという。奇妙なことに、国内の日本語による日本についての研究と海外で実践される日本研究の間には大きな断絶がある。井本さんは日本研究の対象である日本人でありながら、自らも日本について研究する「ネイティブ人類学者」として、この断絶をどのように埋めるかについて考えを深めていった。



▲米国エモリー大学の Social Empathy Lab での研究発表の様子

瞑想体験から、観想研究の実践へ

井本さんにとって人類学とは、外側から対象を俯瞰するだけでなく、同時にその内側に入り込み体感することを両立をする物事の見方でもある。博士号取得後に帰国した井本さんは、慶應義塾大学の地域拠点「三田の家」という留学生や地域住民、生きづらさを抱える学生たちの居場所作りに関わるなかで、瞑想を体験する機会を得た。瞑想や内省を通して得られる実感を伴った個人的な気づきを科学的に研究する「観想学」という研究領域がアメリカで進められていることを知った井本さんは、大学の留学制度を利用して、今度はアメリカを訪れた。現地で観想研究が、医療や教育の分野で進められていることを学びながら、井本さんは自身ができることを考え続けた。「瞑想はもともと仏教や東洋思想と深く関係します。であれば、一方的に観想学を日本に紹介するのではなく、日本で観想研究を進めることで、西洋の観想学の研究者へも新たな知見を提供できる繋ぎ目になれるのではないかと考えました」。2024年1月、井本さんは慶應義塾大学に観想研究センターを設立し、センター長として実践を伴う研究活動を始めた。

井本 由紀 (いもと ゆき) プロフィール

慶應義塾大学理工学部准教授。観想研究センター長。古代の叡智と科学の対話による観想教育を模索する。2004年、慶應義塾大学総合政策学部卒業、東京大学総合文化研究科修士課程に進学するが、英国に留学。オックスフォード大学人類学修士課程・博士課程修了。2009年に博士 (D.Phil.) 取得。2017年度フルブライト研究員としてスタンフォード大学へ派遣。2018年帰国後、「社会的・情動的・倫理的な学び」(SEE Learning) の導入や観想的な実践の研究を進める。

人とのつながりを研究の力に変える

言語学から人類学、そして観想学へ。一見すると研究分野を変遷させてきたように見える井本さんだが、あくまで俯瞰と体感の二つのスタイルを両立させる人類学者であり続けているという。「私自身が成長していくに伴って、より自然でいられる選択をしてきた結果です」と井本さん。人に巻き込まれ、また人を巻き込みながら、自身のキャリアを積み上げてきた井本さんは、その力を「感情知性 (Emotional Intelligence)」と表現する。専門性や認知的能力だけでなく、必要な人と出会い、必要な場に必要な時にいる感性を育てることを大切にしている。研究は「個人の能力だけでなく、人とのつながりのなかで形づくられるもの」という井本さんの言葉は、一つの専門性に閉じこもりがちな研究者の在り方に、しなやかに一石を投じている。

文：乾 将崇

井本先生のお話で最も印象的だったのは、どんな出会いも無駄にせず、研究へと昇華させるあり方でした。バラバラに見える経験や知を「統合」していく技法。今は点にしか見えない私の経験も、いつか大きな視野で統合される日が来ると信じ、日々の出会いを大切にしたいと感じました。



探しに行こう 自分の場所

すべての挫折を資産に変える。 泥臭い「真剣勝負」が導いたAIセンサー

小林 彰人 さん

日本工学院八王子専門学校
ITカレッジAIシステム科

小林彰人さんは専門学校の教員を務めながら、液体の状態測定で味覚をデジタル化する技術の社会実装を目指している。多くの仕事を経験した人生は戦略的な一本道ではない。「自分が何者か」に迷い、投げられた勝負に本気で応じ続けた先に拓けた「自分だけの研究場所」について聞いた。



愛したオーディオを否定された原点

小林さんの探究心の原点はオーディオにある。大学時代、1本100万円もする海外製スピーカーの部品を自前で購入し、理想のサウンドシステムを追求するために毎日のように工作工場にこもった。しかし、いざその情熱を「研究」として深めようとすると、壁に突き当たった。どの研究室の門を叩いても、返ってくるのは「うちのやることではない」「この研究に未来はない」という拒絶だった。オーディオへの情熱を研究として展開する道は、どこにも開かれていないように思えた。研究しなかったことが機械工学、電子工学、感性工学の間にあり、既存の学問領域の中で受け止められにくかったことや、学術的な評価や将来の発展可能性が設計しづらかったことが小林さんの拠り所をなくした。「なんのために進学したのだろうと思いました」。自分が信じたものに「価値はない」と決めつけられた悔しさは、消えないまま、大学院に進学した。

音響技術から「食」の可視化を

大学院で、小林さんはある光景に出会う。それは、「振動」を軸にする音響システムの研究室でドライフルーツ作りやコーヒー豆の焙煎を数理モデルで解析する先輩たちの姿だった。対象に電気を流し、回路図や数理モデルを用いて品質を証明する手法を目の当たりにし、「食品も電気の応答で捉えられるのか」と衝撃を受ける。

自分が磨いてきた信号処理や回路の知識が、食の品質測定に転用できる。確信を得た小林さんは、ステーキの焼き加減を細胞の状態や水分量の変化として捉えるなど、身近な対象の解析に没頭した。かつて否定されたオーディオ技術が、食の品質を可視化する「食品センサー」へと翻訳された瞬間だった。捨て去るはずだった過去の執着が、思いもよらない形で新しい研究へと結実したのだ。小林さんは研究者としてこのテーマを突き詰めることに決めた。



▲液体の複合的な「状態」を測定し、味再現や異常検知に使うセンサー

崖っぷちで放った言葉が 拓いた社会実装への道

ただ、現実とは甘くない。周囲の同期や先輩たちは、早くから論文を発表し、DC1・DC2特別研究員にも採用されていく。そんな姿を横目に、小林さんはアカデミアのシビアな競争に馴染めず、博士課程に籍を置いたまま、生計を立てるために研究の外へ出た。食品メーカーのプラント部門に勤めたり、趣味のトレイルランが高じて実業団に入ったり、研究とは別の道に進みかけた。しかし、「やはり自分の技術で勝負したい」という欲求は消えず、教育しながら研究する道を求めて専門学校の教員という道に辿り着く。いざ望んだ採用面接で「数理モデルをどう教えるのか」と問われた小林さんは、反射的に「100円の部品で、学生が自作できる味覚センサーを作ります」と言った。負けず嫌いゆえの言葉だった。着任後、宣言通りに開発を始め、完成したのは100円の部品で組み上がり、現場で雑に扱っても壊れない味覚センサーだ。メーカーが手を出さない「安さ」と「タフさ」を両立させたデバイスだった。このデバイスアイデアは2024年のリバネス主催フードテックグランプリで評価された。次に経産省IPA未踏アドバンス事業へ採択され、機械学習で液体の状態を

小林 彰人（こばやし あきひと）プロフィール

株式会社DigiTaste代表取締役、日本工学院八王子専門学校AIシステム科常勤教員。筑波大学大学院博士課程修了。博士（工学）。信号処理技術や電気特性を用いた味覚のデジタル化を専門とする研究者・起業家。音響信号処理を応用した低コストかつ高機能な「味覚センサー」の開発において、2024年フードテックグランプリにて最優秀賞とUnlocX賞を受賞するなど高く評価される。プラントエンジニア、ラーメン職人、実業団ランナーといった異色の実務経験で培った現場感覚を強みとし、既存のアカデミアの枠組みに捉われない技術の社会実装に取り組む。専門学校での実践的なIT教育と、スタートアップによる味覚データの可視化・プラットフォーム構築を並行して推進している。

測り、味覚再現や異常検知を行うデバイスで社会実装を目指している。研究費を奪い合うのではなく、研究を続けるための手段として、小林さんは社会に技術を届ける道を選んだのだ。

舗装されない道を、全力で走り抜ける

「何事も真剣勝負が道を拓いてきたんです」。かつて歩んできた道を振り返り、小林さんは言う。自分のやりたいことが社会に否定されても、理想の道に進めないと感じて、目の前のことにぶつかり続ければ、前に進んだ。それは決して自らが望んだ道ではなかったかもしれない。だが、置かれた環境で投げられた勝負に負けるのが嫌で、全力で進んだら、居場所が見つかった。かつて捨てたはずの技術が、勢いで就職した企業の経験が、そして、教員試験での発言から得た経験が、今を支えている。小林さんの舗装されていない道を全力で走り抜ける人生は熱を注いでいたトレイルランニングそのものだ。かつて否定された技術や経験を手に、小林さんは今、誰も見たことのないセンサーの実装に向け、泥臭く駆け抜けている。

文：三宅 進歩

小林さんの全力疾走する姿勢を見ると、目の前のことにフルコミットする大切さを感じます。単なるキャリア戦略ではない、自身の「憤り」や「ハッキリ」すらも現実へと変えていく圧倒的な熱量を持って、目の前の勝負に挑みたいと思います。



探しに行こう 自分の場所

一人ひとりの世界を変える力を引き出す 「設計者」の挑戦

内山 啓文 さん

認定NPO法人カタリバ

自分の現在地を都度観察し、感じる違和感やその解決に向けた試行錯誤は、自分の新たな強みの発見に繋がることもある。内山啓文さんは、ものづくりへの関心から出発し、現在は認定NPO法人カタリバでの外国ルーツの高校生たちのキャリア支援に自分の場所を見出した。



外国ルーツの高校生と社会をつなぐ

外国にルーツを持つ高校生が社会との接点が少ないという課題に対して、そのキャリア支援をおこなうRoots（ルーツ）プロジェクトを推進する内山啓文さん。「『外国ルーツ』という言葉は社会でも知られるようになってきました。そこに紐づく課題として言語に焦点が当たりがちですが、他に様々な要素があり、特にキャリアは大きな課題です」と言う。こうした課題を抱える高校生たちと対話を重ねる中で気づいたのは、一見遠いように感じる関係性も、互いをより知ることによって共通点を見出せるということ。「遠いけど近いという感覚」と表現する内山さんは、彼らの社会との出会いや接点を増やし、将来の選択肢と可能性を広げることと、社会の構造的な課題の解決に挑戦している。

「試行錯誤」なプロセスへの興味

内山さんの出発点は「ものづくり」への関心だっ

た。都立工業高専で機械工学を学んだ内山さんは、卒業後、大田区のメーカーに就職し、メカニカルシールという回転機械の動力を伝える軸部分に用いられる産業用部品を取り扱った。しかし、完成された仕様に沿って設計・製造する工業的なものづくりに関わる中で、幼少期に取り組んでいた工作の楽しさを思い出すようになった。「例えば椅子を作ろうとして、木材を切り出しながら『こんな形はどうか』と素材と対話して試行錯誤を繰り返すプロセスが好きだったのです」と内山さん。もっとと広く学びたいという思いから、働きながら産業技術大学院大学へ進んだ。1年目にビジネス、デザイン、エンジニアリングなどを幅広く学んだ後、2年目に所属した研究室で内山さんは、ユーザーである「人」を理解してより良い体験・ものづくりを行う人間中心設計を軸とした研究に取り組んだ。

行動観察で「人」が抱える課題を捉える

研究室で仲間と共に取り組んだことは、人間中



▲Roots プロジェクトでの学生との交流の様子

心設計における行動観察だった。対象である訪問看護師に同行し、看護師と患者さんのコミュニケーションの様子や、訪問する家庭で何をしているのかなど、その行動をつぶさに観察し、書き連ねていった。これらの記録から、訪問看護師による「ケア」とは一体何かを考え、ベテランにできて新人にできない課題を洗い出すことで、それを解決するサービスを考える。こうした研究から、内山さんは行動観察のポイントが仲間それぞれで異なること、そして自身が人を観察し、その行動背景にある文脈を捉えることを得意とすることに気づけたという。「小学校で転校を繰り返した経験から、『人間観察』は自然にやっていました。それが強みとして生かされるフィールドがあるということも発見でした」と内山さん。その後、デザイン会社へ転職して新しいサービスやアプリの開発に関わった内山さんが、人を理解し且つものづくりを支援できる先として選択したのが、リバネスだった。

自分と人に向き合った先に見出した場所

リバネスで内山さんは、特に高専生や中高生の挑戦に伴走した。水中ロボットを組み立てた高校生が「これで大丈夫かな」と不安になり、なかなか水槽に沈められない。「まずやってみようか」と思

内山 啓文（うちやま・ひろふみ）プロフィール
認定NPO法人カタリバ Rootsプロジェクト所属。
都立工業高専機械工学科卒、産業技術大学院大学修了。専門は機械工学、人間中心設計、UXデザイン。産業機械メーカーでのエンジニアと、デザインエージェンシーでの体験・サービスのデザインを経験した後、リバネスでものづくり教育等に従事。その後、現職。現在は高専GCONサポーターとしても活動し、ビックルボールの普及にも携わる。

う反面、彼の姿を見て、失敗を恐れ、自分の可能性を信じきれない姿を目の当たりにした。さらに、視覚障害のある人を助けたいと考え続けた高校生が、課題は障害者本人ではなく、助けたいと思っても声のかけ方がわからない自分たちとの関係性にあるのではないかと発表した時に、次世代ならではの素直な視点から見出された課題の発見に大きな学びを得たという。「あらゆる人に、世界を変える力が備わっています。ただ、それが発揮されていない状況や環境に身を置く人たちがいる。私はそれをなんとかしたいのです」と内山さん。その思いから、次のキャリアとして飛び込んだのが認定NPO法人カタリバのRootsプロジェクトだったのだ。

自身が感じる悩みや疑問、関心にその都度正面から向き合い、飛び込んでみる。その時、何に一番共感したのかの解像度を上げて理解し続けることで、内山さんは現在地に辿り着いた。試行錯誤する対象がものから仕組みに変わっても、自分と人に向き合い、仕掛け続けていく。

文：井上 剛史

内山さんの話を聞いて、キャリアを「つくる」という表現に対して、私自身初めて腑に落ちました。自身の軸となる思いに向き合い、目の前にある物事に一歩踏み出し続ける内山さんの次なる挑戦をお聞きするのが非常に楽しみです。



あの町の研究者を訪ねて

このコーナーでは、ユニークな活動を続けている研究者を訪ねて日本各地を巡ります。
もしかしたらあなたのいる場所のすぐ近くでも、研究の旅路に行く素敵な誰かに出会えるかもしれません。

現場に触れて、研究は 「解決する力」に変わった

北陸先端科学技術大学院大学 博士後期課程 3 年
株式会社 OWL 研究所 代表取締役
大平 尚輝 さん

防災研究者として最先端の研究を追いながら、株式会社OWL研究所の代表として地域課題の解決にも挑む大平尚輝さん。能登半島地震での経験を転機に、研究を社会実装へつなげる挑戦を続けている。



私は、小学5年生の時に東日本大震災の映像を見て、自然災害の恐ろしさを強く感じたことをきっかけに防災に関心を持ちました。地元の高等専門学校で土木防災を学び始め、地盤分野の研究に取り組みましたが、人工知能やリモートセンシングといった先端技術に可能性を感じ、修士課程から北陸先端科学技術大学院大学に進学しました。大学院では、衛星画像を用いて土砂崩れの被害や発生しやすい場所を分析する研究に取り組んできました。

そんな私の転機は、2024年に起きた能登半島地震の体験でした。土砂崩れによる集落の孤立や救援物資の配送遅延を知り、現地で被災状況を目の当たりにする中で、研究だけでなく現場のためになにかしなければいけないと実感したのです。大学・研究機関での防災研究は進んでいるものの、国が担う公共事業としての防災対策だけでは、その研究成果が現場に届ききっていないことに課題

を感じました。ならば、民間の力も活かしながら仕組みをつくる必要があると考え、2025年10月に株式会社OWL研究所を設立しました（OWL = Observation and Warning for Landslides = 土砂崩れの観測と警報）。

リバネスの岐阜テックプランターに出会ったのは、ちょうど地元の岐阜県で起業に向けた取り組みを具体化しているタイミングでした。参加してみると、「土砂災害による被害をゼロにする」というビジョンに共感し、応援してくれる人や企業が多く、大きな力になりました。研究室の中だけでは、課題の本当の姿は見えません。また、外に出ることで、志を同じくする仲間に出会えます。これからも研究と事業の両輪で、土砂崩れの予測と対策を社会に実装し、この分野を牽引する存在を目指して、地域から新しい防災の仕組みをつくっていきます。

（文・滝野 翔大）

地域テックプランター



Exploring Deep Tech & Solving Deep Issue

TECH PLANTER.

全国各地で実施している「テックプランター」には、研究成果を社会に届け、社会課題を解決したい研究者や起業家が集まります。ファイナリストがプレゼンテーションを行う「テックプラングランプリ」では、普段の研究生活では接することのなかった様々な属性の人との対話によって、自分の研究との向き合い方が変わることがあります。最初は、他の人の発表を聞くだけでも構いません。ぜひ参加してみませんか。

申請者募集中！

東北テックプラングランプリ

開催日時：2026年 11月 7日（土）

募集締切：2026年 9月 18日（金）

九州テックプラングランプリ

開催日時：2026年 11月 14日（土）

募集締切：2026年 9月 25日（金）

関西テックプラングランプリ

開催日時：2026年 11月 21日（土）

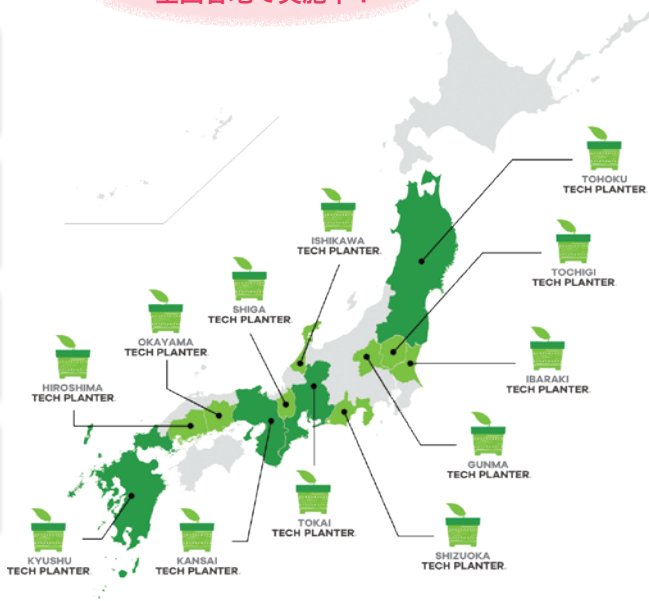
募集締切：2026年 9月 25日（金）

石川テックプラングランプリ

開催日時：2026年 11月 28日（土）

募集締切：2026年 10月 2日（金）

全国各地で実施中！



詳細・エントリーはこちらから！

実施地域・日程についてもwebページをご覧ください。

https://techplanter.lne.st/japan_local/



大平さんも参加！地域テックプランターのプログラム（地域や実施年度によって変わります）



エントリー募集開始

対象エリア内の大学・研究機関等にリバネスのコミュニケーターが訪問するなどして、研究者や産学連携担当者と共に、研究成果の社会実装の可能性について議論します。



キックオフイベント

エントリーを検討している研究者やパートナー企業等が、互いの持っている技術やアイデアを交換し、事業化プランをブラッシュアップする機会となります。



テックプラングランプリ

エントリーチームの中から、選ばれた9～12チームが事業化プランを発表します。パートナー企業等から選出された審査員との熱い議論が交わされます。



個別議論

グランプリ後も、リバネスの担当コミュニケーターと、事業化プランのブラッシュアップや、今後の活動に関する議論などを行うことができます。



リアルテックスクール

テクノロジーベンチャー設立支援に関して経験豊富な講師陣から、会社設立および運営において必要となるノウハウや考え方を体系的に学べる機会です。

地域に根ざした研究職、公設試での挑戦

研究キャリアをいかせるのは、大学などのアカデミアの世界だけではない。全国に約300ある公設試験研究機関(以下、公設試)では、地域に根差した研究と企業支援を両立し、地元のものづくりを技術で支える研究者が活躍している。本コーナーでは、公設試で働く研究者たちの姿を通じて、「地域に貢献しながら研究を続ける」という新しいキャリアの形を紹介し、若手研究者・学生にその魅力を伝える。

茨城の企業と人工衛星をつくる

茨城県産業技術イノベーションセンター 研究調整監
行武 栄太郎 さん

純粋な探究心から金属材料の研究を突き詰めてきた行武さんは、恩師の言葉をきっかけに「茨城県産業技術イノベーションセンター」へ。そこは、地域の製造現場と密接に関わり、技術を社会へと還元していく場所だった。経営者たちと膝を突き合わせ、企業の現場の切実な課題に向き合う中で、宇宙産業という未知の領域へ辿り着く。自身の専門性を最大の武器に、地元企業と共に切り拓く新たな挑戦とは。



無限の可能性に満ちた材料研究に魅せられて

行武さんが大学で取り組んでいたのは、金属粉末をボールミルで攪拌し、原子レベルで結合させて合金をつくる「メカニカルアロイング」の研究だ。機械的な衝撃によって金属原子が剥き出しになった活性面を露出させる。金属原子同士が直接接触することで、常温で原子の拡散や結合が可能になる。これは、一般的な溶融法では難しい種類の合金をつくるのに適している。例えば、融点が3400度を超えるタングステンをアルミニウムに加えようと熱をかければ、沸点が約2500度のアルミニウムは合金化する前に蒸発してしまう。少年時代から百科事典を読みあさり、昆虫や天体、歴史に至るまで多方面に好奇心を育んできた行武さんだが、こうした多彩なプロセスに、科学的な面白さを見出した。さらに大学院へ進学後は、これら冶金的な知見を活用してマグネシウム合金の成形加工に関する研究を行い博士号を取得した

後、恩師から「茨城県でマグネシウム合金のプロジェクトをやるから行ってこい」と背中を押され、茨城県に入庁し、センターへ配属。当初は「研究所」と聞いていたこともあり、「大学の延長のようなものだろう」というイメージを抱いていたが、いざ足を踏み入れてみると、そこは地域企業の切実な課題と向き合う日々が待っていた。

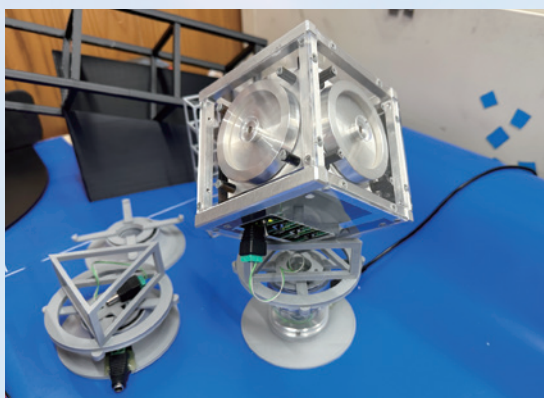
「その技術、いくらで使える？」

一企業現場が研究を変えた

配属後、行武さんは実用化に向けたマグネシウム合金の研究に従事する傍ら、先輩研究員に連れられて多くの地元企業を回った。そこで対話したのは、自らも技術者出身で現場に精通している経営者たち。行武さんは先輩に「新しく入ったマグネシウム合金のプロ」として紹介され、熱意をかけて研究してきた技術の素晴らしさについて、ある社長にプレゼンをした。技術の価値は理解してもらえたが、「コストは見合うのか」というシビ



名称が「イノベーションセンター」に刷新され、技術支援に留まらず「ビジネス創出」を組織の柱に据えている点が最大の特徴です。企業の収益や産業の持続性までも見据えた多角的な支援を行っています。専門分野を深めながらも、経営や行政の視点を持って社会と繋がる、研究と地域貢献がダイレクトに結びつく環境が自慢です。



▲実際に作製した超小型衛星の実物模型

アな問いが投げかけられた。これまで考えたことがなかった問いに面食らった行武さん。「なぜ、優れた技術がコストの壁に阻まれるのか」。行武さんは上流工程から価格形成の要因を探った。実際に企業で活用される際の工程もふまえて研究開発を続け、研究成果を元に再訪すると、それまで「高くて使えない」と懐疑的だった社長の反応が変化した。「それなら一度やってみるか」という前向きな言葉を引き出した時、自身の研究が社会の役に立つ確かな手応えと達成感を得たという。

公設試から始まる宇宙産業への挑戦

ある日、茨城県の宇宙ビジネス推進に伴ってセンターで宇宙関連のテーマ立ち上げを行武さんが担当することになる。今までの専門と異なる分野で何をすればよいのか、途方に暮れながらも「宇宙といえば」くらいの感覚で小型衛星の研究をスタートした。これが結果的に地元企業と繋がっている公設試らしい取り組みになってい

行武 栄太郎（ゆくとけ えいたろう）プロフィール
日本大学大学院生産工学研究科博士後期課程修了。博士（工学）。2005年、茨城県に入庁し、茨城県工業技術センター（現・産業技術イノベーションセンター）に配属。材料工学、特にマグネシウム合金の研究開発に従事する。現在は研究調整監として「いばらき宇宙ビジネス創造拠点事業」の技術的側面をリードする。県内企業の高い技術を宇宙品質へと引き上げ、新産業の創出に注力している。

く。はじめは行武さん自身の材料工学の知見をもとに、衛星の筐体を作製。ラボでの試作から実用的なものを作る際には、金属加工に強みをもつ地元企業に協力を仰いで開発を進めた。その後、通信、姿勢制御、推進と衛星に必要な技術をそれぞれの強みをもつ地元企業とともに開発。「新しく宇宙の取り組みをはじめませんか」と1社1社に話しに行き、現在は、40社以上もの企業の技術を結集して衛星に必要な種々製品の試作開発を進めている。試作開発した製品を国内外の展示会で披露し、「この高度な製品は茨城県内企業の技術で成り立っている」と広く発信することで、地域全体の技術力を新たな市場へ売り込む機会も創出している。実際に茨城県では「宇宙サブライネットワーク」を構築し、県内企業の技術力を体系化し、グローバルな展開も見据えている。専門性を極め、それを地域社会のために使う行武さんの歩みは、研究者という生き方の可能性を大きく広げている。
(文・橋本 光平)

L GRANT 申請者募集中!

リバネス研究費とは

リバネス研究費は、「科学技術の発展と地球貢献の実現」に資する若手研究者の研究遂行を支援するための研究助成制度です。学部生や大学院生が採択された実績もあります。やってみたい研究がある、独立後に向けて研究費申請の経験を積みたい、そんなアクティブな若手研究者なら、誰でも応募できます。この機会に、自分の研究アイデアを具体化し、研究スタートへの第一歩を踏み出しましょう!

第73回 リバネス研究費

助成対象: 自分の研究に熱い思いをもっている40歳以下の
若手研究者・大学院生・学部生・高専生
用途: 採択者の希望に応じて自由に活用できます

● グンゼ賞

対象分野

生体吸収性材料×異分野技術で生まれる新価値に関するあらゆる研究
体内で利用可能な生体吸収性材料を起点とした研究を広く募集します。
自由な発想で、分野にとらわれずに、新たな価値を創出するテーマを求めています。

「キーワード」

- 新規生体吸収性材料(樹脂、セラミックス、タンパク質、金属など)
- 新規成形加工方法(射出成型、発泡、3Dプリンターなど)
- 足場材料の機能化方法
- 生体吸収性材料×○○(例: 薬、ロボティクス、AIなど)

採択件数 若干名

助成内容 研究費50万円

申請締切 2026年7月31日(金) 18:00まで

パートナー企業 グンゼ株式会社

担当者
より
一言

グンゼ株式会社では、縫合糸や人工皮膚、人工硬膜など、主に体内に吸収される生体吸収性材料をキーワードに研究開発を進めています。メディカル分野にとらわれず、幅広い分野における自由な発想を歓迎します。皆さんの情熱とグンゼのアセットを掛け合わせた、新たな価値を創出する研究テーマで、「明日をもっと、こちよく」を実現する仲間を募集しています。

● GX Frontier賞

対象分野

GXの実現につながるあらゆる研究

エネルギー、素材、農業、製造、AIなど分野を問わず、循環型社会や次世代産業の創出につながる独創的なテーマを期待します。

「テーマ例」

- ・フュージョンエネルギーに関する研究
- ・生物機能を活用した次世代ものづくりに関する研究
- ・CO2を排出物ではなく資源として再定義する研究
- ・未利用熱や廃棄資源を循環利用する地域GXに関する研究

採択件数 若干名

助成内容 研究費50万円

申請締切 2026年7月31日(金) 18:00まで

パートナー企業 株式会社リバネス

担当者
より
一言

GXは単なる脱炭素ではなく、社会構造そのものを変革する挑戦です。エネルギー、素材、農業、製造、都市など、あらゆる産業は今、「大量消費型社会」から「循環型社会」への進化を迫られています。一方で、地域の未利用熱、工場排熱、廃棄資源、属人的技術など、現場には未解決の課題が数多く残されています。本研究費では、現場課題と向き合いながら、未来の産業構造や社会実装につながる独創的な研究を広く募集します。

詳細及び申請方法についてはこちらから

<https://r.lne.st/>



予告!

2026年度 incu・be 賞設置決定! 9月より募集開始

若手研究者のための研究キャリア発見マガジン『incu・be』は、「若手研究者が目標を見つけ、それに向かって実力を養い (incubate)、未来の自分を形づくる (be)」という想いを込め、2006年に創刊されました。リバネス研究費「incu・be 賞」は、その誌名の由来にもあるように、学生時代に自ら提案した研究テーマに挑戦し、研究を通じて自らのキャリアを切り拓いてほしいという願いから、大学院生を対象に毎年設置している研究費です。

2026年度の募集は、9月1日より開始予定です。詳細は『incu・be』9月号にてご案内いたします。ぜひ今のうちに、自身の研究アイデアを温めておいてください。

incu・be 賞 概要

対象分野

大学院生が自ら取り組むあらゆる研究

大学院生を対象に、自身の独創性やパッションを反映した「自分が推進したい研究テーマ」を募集します。研究分野は不問です。

採択件数

若干名

助成内容

研究費50万円、(奨励賞は10万円)

設置企業

株式会社リバネス

本賞では、博士後期課程の学生および進学予定者を対象に、分野を問わず、自身の研究に強い想いを持って挑戦する若手研究者を広く募集します。審査では、研究テーマそのものの完成度だけでなく、「なぜ今、その研究に取り組むのか」という研究者自身の意志や背景を重視します。自身の問いに真摯に向き合い、新たな知の創出に挑戦する研究者からの応募を期待しています。

まずは、オンライン説明会に参加しよう!

<リバネス研究費 incu・be 賞 オンライン説明会>

研究費の趣旨説明や今後のスケジュールに加えて、申請のポイントをお伝えする予定です。あわせて博士課程で研究に取り組む意義や、その先のキャリアについても議論する場にできればと考えております。博士課程への進学を検討している方、現在博士課程に在籍している方は、ぜひご参加ください。

内容

- ・申請書作成のポイント解説
- ・「なぜその研究を行うのか」を言語化する方法
- ・いま、社会の中で博士学生に求められる研究者像
- ・リバネスで活躍する博士の事例紹介 等

日時: 2026年7月10日(金) 17:00-18:00 (オンライン)

申込: 以下フォームよりお申し込みください

https://lne.st/incube_grant



カーボンリサイクルに 資する研究助成 応募者募集！

カーボンリサイクルの社会実装に向けたあらゆる段階の研究開発に対して充実した支援を行い、多くの企業や研究者の皆様のチャレンジを後押しする広島県の助成制度です。

◎ 募集テーマ

カーボンリサイクルに直接的または間接的に資する幅広いテーマ

※カーボンリサイクルとは炭素資源として二酸化炭素を回収し、多様な炭素化合物として再利用すること。

◎ 対象と助成内容

種類	助成対象	助成内容
①カーボンリサイクル関連技術 研究開発補助金 基礎研究支援型	大学等の研究者、中小企業	最大 400 万円／最長2年 (上限 100 万円／半年)
②カーボンリサイクル若手研究者 支援プログラム(一般枠)	40 歳未満の研究者 (育児休業期間には配慮)	最大50万円／件

◎ 募集期間

2026年5月20日(水)～2026年8月3日(月) 17時まで

◎ ウェブサイトから申請フォームに登録

①補助金 <https://ld.lne.st/zmdu>

②若手支援 <https://ld.lne.st/ibec>



詳細・お問い合わせ

cr@lnest.jp (環野・海浦・橋本)



私らしく、研究者として生きる道へ アド・ベンチャーフォーラム



AVF (アド・ベンチャーフォーラム) は、「研究者の新たな活躍の場を発見する」をテーマに、学生・ポスドクといった若手研究人材とベンチャー企業が出会う場です。

Add Venture Forum 2026 秋 開催決定！

【日時】2026年11月22日(日) 13:00～17:30

【場 所】センターオブガレージ(東京都墨田区)

<https://avf.lne.st/avf/avftokyo/>



1. ショートセミナー：研究内容だけでなく、その背景にある想いも伝え、 連携を加速する自己紹介を作る

自分の研究内容だけでなくその背景やそれに取り組む想いを自分の言葉で表現した自己紹介は自分と立場の異なる人と連携を開始するための土台になります。ショートセミナーでは、参加者自身の「Question (問い)」「Passion (情熱)」を整理し、より効果的な自己紹介を作成します。その後のブースセッションでのコミュニケーションをより良い物にすることを目的としています。

2. ブースセッション：ベンチャー企業と直接対話する



企業側からの一方的な情報提供ではなく、企業と学生の双方向の対話を通じて価値観や研究の背景にある想いを共有できる機会です。対話の中で、企業と学生双方に価値のある連携プロジェクトの構想や、共同研究、インターンシップの実施に向けた議論が進みます。

3. アド・ベンチャー奨学金：自身の ビジョンを伝え、共創を提案する

ブースセッションで議論した連携プロジェクト案について、具体的な提案を、ベンチャー企業に対して行います。そして、実際にそのプロジェクトを前に進めるために、活動費の支援としてアド・ベンチャー奨学金という制度を設けています。当日申請をした参加者の中から、選ばれた方に10万円の活動費を支給し、その後の活動をサポートします。



株式会社リバネスは、 博士を積極採用しています

■リバネスは、「会社の形をした研究所」

「研究を続けたい。」

その想いの奥にあるのは、単に研究者という職業を選びたいということではなく、「問い続ける」という生き方を貫きたい、という情熱ではないでしょうか。

しかし一方で、アカデミアだけでは研究成果を社会に届けきれない現実や、企業では自身の専門性や探究心を十分に活かしきれないもどかしさを感じる人も少なくありません。

リバネスは、そのどちらでもない場所です。私たちは、「世界一おもしろい研究所をつくる」という想いを持った若手研究者たちによって立ち上げられた会社です。リバネスは、利益を追求するためだけの企業ではなく、科学技術の発展と地球貢献のために、問いを立て、知識を生み出し、社会実装まで行う集団です。



■リバネスで活躍する博士たち



製造開発事業部

井上 麻衣 博士（国際協力学）

東京大学大学院にて博士号（国際協力学）を取得。国立系研究所にて約6年間、持続可能な開発を目指したビジョン研究や再生可能エネルギーの導入可能性評価研究等に取り組み、環境・社会・経済を横断する視点から社会の未来像を探索してきました。その後、研究の知を変革につなげたいとの想いから、リバネスに入社。以来、研究者・教育者・地域・企業など多様な立場の人々をつなぐプロジェクトを推進し、研究者の挑戦や哲学を社会へ届ける活動を続けています。また、『incu・be』の制作にも長年携わっています。現在は『想いある人を起点に社会システム変革へつなげる』をテーマに掲げ、一人ひとりの想いを起点として共感と行動の連鎖を通じて、新しい当たり前を創造する仕組みづくりに取り組んでいます。

研究者向けにリバネスが仕掛ける、 イベント・プログラムに参加しよう

リバネスが主催するイベントやプログラムに参加することで、リバネス社員とのコミュニケーションを深め、目指すビジョンや仕事のイメージを共有することができます。

ブリッジコミュニケーションコース2026 異分野チームで地球貢献プロジェクトを構想し、共感的対話、プレゼン、リーダーシップ、ライティングを実践で学ぶ。異なる分野や業種とのプロジェクトや共同研究を推進したい人におすすめ。	日時：2026年6月24日～8月27日(全6回) 場所：リバネス本社(東京都新宿区)+オンライン https://univ.lne.st/courses/bc2026/
超異分野学会 大阪2026 (HIC) 異分野研究者、企業、町工場、ベンチャーと議論し、ポスターやピッチを通じて共同研究の種を見つけられる。専門を越えた対話力と研究の社会接点を広げる場。	日時：2026年9月5日(土) 09:30～19:00 場所：ATCホール 会議室(大阪市住之江区) https://hic.lne.st/schedule/osaka2026/
アド・ベンチャーフォーラム東京 2026秋 大学院生・ポスドク・若手研究者が研究開発型ベンチャーと直接対話し、共同研究、インターン活動費獲得まで試せる。研究キャリアを広げる場。	日時：2026年11月22日(日) 13:00～17:30 場所：センターオブガレージ(COG) (東京都墨田区) https://avf.lne.st/avf/avftokyo/
ラーニングクリエイターコース2026 専門性を地域や子どもの学びに広げる「教育プログラム」を設計し、企業・学生・地域と共創する力を鍛える。研究成果をアウトリーチや場づくりに展開したい人におすすめ。	日時：2026年10月30日～2027年1月29日 (全7回) 場所：ことまちラボ(東京都墨田区) https://univ.lne.st/courses/lc2026/

あなたの研究力が、社会を変える第一歩に

採用に関する詳細や最新のイベント機会は
「リバネス・採用」で検索してください

<https://lne.st/recruit/>

saiyo@lnest.jp



『incu・be』を作っているのはどんな人？

編集部スタッフを紹介します



ライター
駒木 俊
修士(工学)

プロフィール

東京工業大学(現 東京科学大学)大学院修士課程修了。専門はシステム制御理論。2023年11月リバネス入社。創業開発事業部にて、課題解決に意欲的な研究者の社会実装の伴走、研究開発型ベンチャーの伴走に取り組む。

私には「誰もがより豊かさを追求できる持続的な社会を実現したい」という想いがあります。学費免除や奨学金、また多くの出会いにも支えられて大学院まで進学できた経験から、教育や公的機関による既存の豊かさの分配も重要である一方で、新しい技術や産業が生まれることで社会全体の豊かさの総和を大きくするのも大事だと考えました。社会の仕組みを望ましい方向へ導く方法を考えるため、大学院では物事の背後にあるメカニズムを数学で解き明かす「システム制御理論」を学び、CO₂排出量取引制度における企業行動をテーマに、よりよい制度設計のあり方を研究していました。

卒業後、新たな産業を創る研究開発型ベンチャーの創出に挑戦するリバネスに入社しました。入社前は「ベンチャー支援の会社」だと思っていましたが、実際には教育、行政連携、事業創出まで、「研究を社会に出すためにあらゆる手段を取れる」会社でした。現在は、卒業した大学で研究テーマが近かった研究室から生まれるベンチャーの立ち上げに取り組んでいます。研究者と向き合う中で、1技術だけではない、多様な仲間を巻き込んで事業化の場をつくるため、自らも「当事者」として挑戦することの重要性を実感しました。

『incu・be』では、研究成果だけでなく、「なぜその研究を選び、どんな未来を描いているのか」を届けたいと思っています。研究を続ける中で、「このまま研究を続けるべきなのか」「自分の研究は社会とどう繋がるのか」と悩む若手研究者は少なくありません。だからこそ、研究者一人ひとりの想いや問いを伝え、新しい挑戦や仲間が生まれるきっかけをつくっていききたいです。

リバネスでは仲間を募集中です。

「科学技術の発展と地球貢献を実現する」の理念のもと、自らの専門性を活かし、未来を創造するプロジェクトを生み出したい研究者の仲間を募集しています。『incu・be』の制作などを通じて多様な研究者に出会うことができます。リバネスの採用については、28ページ以降をご覧ください。incu・be編集部への投げ込みも大歓迎です！巻末の連絡先までご連絡ください。

若手研究者のための研究キャリア発見マガジン 『incu・be』とは

『incu・be』は、目標を見つけ、それに向かって実力を養い(incubate)、未来の自分をつくり出す(be)ためのきっかけを提供します。自らの未来に向かって主体的に考え行動する若手研究者を、企業・大学とともに応援します。

『incu・be』の配布・設置について

『incu・be』は、全国の理工系大学・大学院の学生課・就職課・キャリアセンター等に設置いただいているほか、「研究応援教員」のご協力により研究室や講義にて配布いただいております。学校単位での配布・設置をご希望の場合、その他お問い合わせは下記までご連絡ください。

株式会社リバネス incu・be編集部
TEL : 03-5227-4198
E-mail : incu-be@Lne.st

++ 編集後記 ++

incu・beの記事を読んでいると、取材を受けていただいた方々のキャリアや考え方の多様さに驚くと共に、大学で自身の専門に閉じていた当時の自分では想像できない生き方だと感じます。今では、リバネスで様々な立場の人たちと科学の発展のために活動しており、過去の自分には想像できない面白い仕事できています。そのきっかけは、リバネスの先輩から専門性を活かしながらも、そこに閉じない生き方があることを知ったことでした。今回の冊子でも、自身の専門を突き詰めながらも、多様な生き方をしている研究者の方々を取り上げています。その姿を知ることで、研究をさらに頑張り、少し外にも目を向けるきっかけになれば、嬉しく思います。

(八木 佐一郎)



2026年6月1日 発行

incu・be 編集部 編

staff

編集長 八木 佐一郎

編集 石澤 敏洋/井上 剛史/大坂 吉伸

環野 真理子/長 伸明/仲栄真 礁

西村 知也/吉川 綾乃

記者 磯貝 里子/乾 将崇/岩田 愛莉

駒木 俊/滝野 翔大/土屋 菜摘

橋本 光平/三宅 進歩

art crew さかうえ だいすけ

清原 一隆 (KIYO DESIGN)

発行人 丸 幸弘

発行所 リバネス出版(株式会社リバネス)

〒162-0822 東京都新宿区下宮比町1-4

飯田橋御幸ビル6階

TEL 03-5227-4198

FAX 03-5227-4199

E-mail incu-be@Lne.st (incu・be 編集部)

リバネス HP <https://lne.st>

印刷 株式会社 三島印刷

© Leave a Nest Co., Ltd. 2026 無断転載禁ず。

中高生のための研究キャリア・サイエンス入門
『someone』(サムワン)



研究をはじめたばかりの読者に、最先端の研究内容をご紹介します。
未来の研究仲間となる後輩にお勧めください。
お問い合わせ: ed@Lnest.jp

